

三輪神道秘事

今日両部神道についての過ちは、目に余るものがあります。世俗に流されずに向(ヒタスラ)修行に励むには、多事多難の時代であります。叡尊僧正が開かれた三輪神道と異なった、怪しげな三輪神道が一人歩きしている事も、悲しい事実であります。もし既成の三輪神道ならずば、戒律において事のほか厳しい慈雲尊者が三輪神道を学ばれるはずがありません。幸いな事に高野山増福院文庫に『神道三輪神道流慈雲傳南都傳伝授目録』が残されていますが、三輪神道に関する秘事は、両部神道に関する秘事が数多くあります。中でも『三輪大明神縁起』は、両部神道を学ぶものにおいては、最も大切な秘伝書であり、神事に関する秘伝が述べられていますので、元成師は、講伝の前に『三輪の秘事』を伝授されています。

◎ 御輪の秘事

大神(オホミハ)なるは、即ち大蛇(オホミハ)と同音なり。さらに大蛇(オホミハ)なるは大精靈(オホミハ)と同音なり。されば大神とは天神地祇の地祇にて、國津神の総稱なれば中津國なる此の國土における元締めにあたる神なり。神は元來姿なく隱身(カクリミ)の方にて一種の物怪(モノノケ)、即ち精靈(ミハ)なり。その精靈において偉大なる力持ち合わせられたまう方ゆえに大なる尊稱を用い大精靈(オホミハ)と稱したり。大神なる山には古來頂の奥津磐座(オクツイワクラ)に大者主神(オホモノヌシノカミ)、中腹の中津磐座(ナカツイワクラ)に大己貴神(オホナムチノカミ)、山麓の邊津磐座(ヘツイワクラ)に少名彦命(スクナヒコノミコト)の三神が住み給う山なれば、三つの精靈が座す山より三輪なる言葉生じたりとも傳うなり。

古來神の依代(ヨリシロ)、神の宿り給う木なる宿り木に榊などあり。されば三輪も杉・松・榊と定めたり。杉は直くなる木にて正直の旨を表し給

ふ。又久しき木とも書き、天長地久を表すと。松は清々しき翠なる木にて清浄の旨を表し給ふ。又公木とも書き、君公の齡幾久しと。榊は春秋葉の色變わらず神の心慈悲を表し給ふ。又神の木とも書き、神の神事（カミツワザ）に用いるなりと。正直・清浄・慈悲の三つの道なるを之惟心道（カシナガラノミチ）と云うなり。三輪は此の三つの道を歩む事により、眞の神にあいたてまつるところなり。

三輪大明神縁起

一・天照太神本迹二位之事

此の天照太神本迹二門について申しのべるなり。今古傳書を通じ現在に鑑みて。其の旨を明らかにし奉る次第なり。

先ず本地は。予はかつて某年某月日に於いて全七ヶ日の間參詣をするなり。天照皇太神の御名を至心に唱え奉る事七ヶ間。第七日の結願之日に於いて早旦。未だ明けやらぬ天が第一義の天なりと。照が光明遍照の照るを表し。尊は大日尊の尊を意味するなり。此の三段を更に考案するに。天は應身如來。照るは報身如來。尊は法身如來となるなり。眞性。觀照。資成の理智悲の三點と謂ふなり。故に知る。此の御名は三身即一の大日を意味し。此れは本地の意を約したり。

次に垂迹とは。三處の位に依り。御名も字は同じからず。御は天上の御名に於いては天照なり。御降臨之後は二所と別名になり。大和國三輪山に於いては大神（オオミワ）大明神なり。伊勢國神道山に於いては皇太神と申すなり。一躰にて三つの名前尤も知り奉りべき事なり。此の如く愚案するに於いて。天照大神の名を奉る御名義に於いては。日本書紀上の卷に云く。是れに於いて二神（伊耶那岐。伊耶那美）共に日の神を生ず。大日靈貴（オオヒルメムチ）と號す。此の子は光華明彩にして。六合之内に徹照し給ふに。二神はことの外喜び給ひて曰く。吾が子多しと雖も未だ此の如き靈異之見に合う事なく。宜しく此の國に留まらずして。速やかに天に送り給ひて天上之事を授け給ふべし。

是の時天地未だ遠くに相ひ去らずおりなり。故に天之柱を以て天上に送り挙げ奉るなり。天照と號し奉る御名の義なり。

一・兩所太神御鎮座所事

垂迹神として天降りしは。天照皇太神は伊勢國度會郡宇治郷神道山麓御裳濯河の河邊にて。三輪大明神は大倭國城上郡御室山は金剛界覽字の河（初瀬河）。胎藏界鑿字の河（卷向河）に挟まれた邊りなりと。

一・伊勢大神 三輪との前後の事

日本書紀神代の卷に云く。大己貴命（オホナムチノミコト）が。天照皇太神に白して言さく。今何處に住まう事を欲するや。答えて曰く。吾れ日本の國三輪山に於いて住む事を欲すると。故に三輪太神御降臨神代之事を知るなり。天照太神の御鎮座は垂仁天皇の御代なり。前後は顯にして明白なり。之に依りて前（早きの意）を以て本と為し。後

に以て迹と為すなり。是々一重の本迹なり。若し佛法に依る奥旨たるや本迹と為る。

又是れ三輪は本なり。正に佛法に依らば相互の關係（相故の意）を詳らかにして神道山を迹と爲す。佛法は示現したる言葉。好まざる（忌むの意）により相互の關係を明らかにするなり。即ち兩所の山を以てなり。其の號は同じからずなり。伊勢御鎮座山は神道山と名づく。三輪山は御室山と云ふ。御室山は佛法嘉名に依るなり。即ち華藏世界なり。例えば室生山と云ふなり。今案ずるに當神の御事に。御室と書く事淺略世間の言葉なり。本地の効能を約するには應に三無漏と云ふなり。其の故に既に嶺は八葉に別れしなり。谷は三鉢を象る。三鉢は既ち三部なり。今此の山は最も三部の効能を表すなり。三部における大日の齋徳並びに御神躰鎮座し給ふ。故に無漏純圓三尊。此處に住み止まる故に三無漏と云ふなり。御室と書く事僻事なり。此の能居の本地に付き三無漏と名づく。若し所住の處に約せば。應に三室と云ふべし。三佛所住之寂光の土故なり。經に曰く。釋迦牟尼佛。毘盧舍那と名づく。偏に一切の處。其の佛の住處。常寂光と名づくるは是の意なり。毘盧は遍に一切の處翻りて舍那は含藏と翻る。釋迦牟尼佛を毘盧遮那と名づくは。三佛一體の儀なり。則ち三無漏之名なり。偏に一切の處此の大明神は草木國土を以て依正と爲し給ふ。甚深之妙義なり。其の佛の住む所を常寂光と名づくるは。三

室の義なれば其の意知るべし。此の抄の中に御室と書くは。且に古説に順ふなり。実義を存する時は上記の如く知るべし。御室は一に能く所二に備わりたるに號するなり。甚深微妙之義を秘めると舊記に云ふ。山を御室と號すは嶺は八葉に別れ。谷は三鈿を象る。山の南と北に流る二河の内。北の河を鏝字の流れと號し。南の河を覽字の流れと號す。兩流落合ひ流れる二河合流は不二にして理智を表せば。ここより。不二の河と號し三部和合を説き給ふとあり。又靈神故に降臨し給ふ時託宣の御言に云く。社殿を造り天に極み。地を牢し以て其の栖かと為す。法體は周遍し草木國土。悉く皆な我が體なり。悉く皆な我が栖なり。何處に我が栖あらざるや。如何なる草木も我が體にあらざるやとあり。此等の道理草木成佛し。娑婆寂光甚深の義を表すなり。當社大明神の奥において顯れ佛法御之條は炳（アキラカ）にして然りなり。所詮天宮において天照皇太神は佛部法身如來なり。三輪山は天神大明神にて金剛部法身如來なり。神道山皇太神は蓮華部應身如來なり。古記に云く。天照太神は觀世音の垂迹にて其の義符号す。此れ則ち次の如く眞性。觀照。資成の理智悲の三点と成るなり。三輪山の姿は三鈿を以て表と為し御事を示す。併せて此の意なり。此の義秘密奥旨なり。修行正意なり。其の憚（ハバカル）所有りと雖も。存する所有るにより之を記すなり。

此の御室山は又は又は三輪山靈神と號す。社殿は普通之社殿に非ず。木を以て輪を結び社殿と為すなり。故に三輪と云ふなどあり。私案に云く。木を以て輪と為すと云ふに、古老口傳によれば五木を以て其の輪と為すといふ。次に五木は古老の口傳に云ふに。此の靈神は三靈木を以て御神體と為し。五木を以て御殿と為すとあり。三靈木は松。杉。榊なり。五木は檜。柞（ハハソ）。椿。青木。櫻なる等の記文も有り。五木を以て社頭と為す。明らかに知るべし。彼の輪である五木で以て其の輪と為すべしと云ふ事を。又案じ根本を約して云ふに。五木は必ずしも五木に限る必要はなきなり。其の故は御託宣言に。已に周遍である法界を我が體と為すとあれば、如何なる草木と云えども。吾が體に非ずと云ふ事なしと告げ給ひしなり。

五木は大日如來の五智を表す。三木は佛部。蓮華部。金剛部の三部を表すなり。又記して云く。武一原大納言の娘が夜な夜な通い來る男の素性を。父が怪しみを除かんとし。通つてくる男の下襲に。母の教えに従ひ麻系の糸巻き（邊會中糸）の端に。針を通しして糸を分からぬようにつけしと。其下襲の糸を引いて男は去り。夜明けに見るに残る麻糸は僅かに三勾（ミワ）なるを以て。三輪と稱したりと有り。今私案に及ぶに。當山は専ら光明山と申すべきなりと。古老の傳に有り。此の御室山は時々金色の光明が現れ。

山内を明るく照らし輝やかせる奇瑞あるは。其の月の十六。七日頃。満月が東から昇り。空中に大光明を現すと云うなり。此の如き事多くの書物にも散見し。一夜限りの事もあれば。二夜の時も。三夜の時も有り。此の光明現ずる事実に付いては。當所や近隣に住む百姓衆が多く見。御室山は光明輝く山と云ひしより、名づけられたるが。此の光明。他に見る事の無い不可思議なる事実なり。

己上當所御室山名義について畢る。

天照太神を二河というは。一つには御裳濯河にて人未だ入らざる山奥より流出し。伊勢の杜（モリ）なる御社（ミヤシロ）の近くにて合流し給ふ。二つには五十鈴河なる。神道山の奥より流出し。御裳濯河と合流するなり。一つの河が流れ落ち。合う流れの末を御裳濯河と云ふなり。御裳濯河と號するは。其の昔垂仁天皇の御息女であらせ給ふ大和姫尊が、太神宮の御神體を奉載して、國々處々廻行され給ふ時に。此處に到りまし。腰を纏ひし御裳須會の穢れを。此の河に於いて洗浄し給ふ故に御裳濯なる河の名生じたとの由来有り。五十鈴河は古来は五百鈴川と書きたるなり。昔神道山の奥に於いて。五

百人もの仙人が修行の為に。此の山に座して鈴を用いて勤行したるに由来し。此れに依りて五百鈴河となり。後五十鈴川となりたると。

次に三輪大明神の御河なるが。此れも二河なり。一名覽鑊不二の河と稱するなり。此の河は御室山の奥より流出して。山の南北を山に沿って流れ。大明神の御前にて。西より來り一河と成りて。さらに流れ行くは。まさに其の姿曼陀羅を圖繪するが如きなり。古老秘傳に云く。此の二河を覽鑊による不二の河と見立て。北の河を鑊とし。南の河を覽と名づけ。落ち合ひ流れる所を不二の河との習いなりと。二河合流するは不二にして理智の作用を表し。不二の河として流れるは。三部和合を示し給ふ。誠に以て貴し。最も信ずべし。

一・兩大明神社頭相貌（ソウボウ）の事

天照大神が御坐す。伊勢の社地に付いては言葉を以て顯らかにし。述べる事恐れ多く。まして僧侶故。拜見する事適わざるなり。是非の沙汰に於いて能わず。仍て之を略するなり。

三輪大明神社の次第に就いては恐れ多いが、甚だ恐れ多い事ながら、歸命渴仰の為に。現在の相貌につき。大約について述べてみる次第なり。古老の秘説に依るもので。之に大まかな注釋をいれる次第なり。

一・御室山形相の事

大御輪寺別當重代相傳秘訣に云く。當山覽鑊二河の兩方が峰中に於いて。鑊字なる河の流れている北山を胎藏界尾と號し。鑊字なる河の流れている南山を金剛界尾根と號す。この兩界の中央部にも尾根ありしと。金胎二つの河合流して不二の河となり。不二尾根と名づくとあり。又二つの河の行き合う所。橋の西路を六道と號すと有り。是れにより北は胎藏界の尾根にあたり。佛部を表せば。即ち佛眼尊が是れにて。南は金剛界の尾根にあたり。金剛部を表せば。即ち一字金輪が是れなり。中なる不二の尾根は。即ち蓮華部なり。即ち千手觀音が是れなり。當山の形態は事に觸れ處に従ひて。甚深奇妙と云ふ事勿れ。つらつら案じまするに。本地の天照太神の三所の御在所は。天上に於いては常寂光土なり。然るに三輪は。即ち實報淨土なり。神道山は。即ち同居女。女界なり。

(大日貴神は女神なり。此れに仕える日靈女は。倭媛より代々女が勤め。その宮は男子禁制の齋宮なり)。女女救世の徳を以て顯にし給ふなり。三所の惣體を述ぶれば。即ち寂光土なり。委細は曼陀羅の圖の如し。大御輪寺の圖は相公前長老淨音房が自筆で。此の秘密相承性忍二十九代なりと有り。

古記に云く。御室山は峰が八葉に別れ。谷は三鉢を象り。其の麓に御神號。八所権現が住み給うなり。此の山の中に住む御神は。皆な天照太神の父母兄弟に渡らせ給ふ。即ち是れは兩界曼陀羅の諸尊なり。八所権現とは大神。日向。雨増。若宮。神寶。檜原。華鎮。御子宮を謂ふなりと。或る記には田苗八王子を加えて。惣じて九所別宮と申す事あり。

一・諸社本地の事

北は胎藏界大日。南は金剛界大日。中央は不二大日なり。

北は檜原大明神。即ち伊邪那岐。伊邪那美二尊なり。

南は大神大明神。即ち天照太神なり。

異説に云く。北は薬師如来。南は釋迦如来。中央は彌陀如来。

薬師如来は男。第四王子太神宮なり。釋迦如来は女。第三王女。雨増宮なり。彌陀如来は男。第一王子日向宮なりと有り。

八所権現も。又異説有り。

伊弉諾。大日。伊弉册の宮は寶幢。或ひは薬師如来。雨宮は開敷蓮花。或いは寶生菩薩。日向は阿彌陀如来。大神は天鼓音。或るいは釋迦如来。神寶は觀世音菩薩。若宮は彌勒菩薩。花鎮は文殊菩薩。田苗八王子は不動明王など有り。

私に云く。凡そ此の靈神の事に付いては。地形。社相。一々相貌に及び。三部の妙用(働き)。五部の象(かたち)によるなり。三部とか。一部は。即ち此の廣義。狹義にて同じからずなり。一つには最略にて。五つには廣義を開き。二法には略義を明らかにし。三部に於いては上下を帯び。中の處を兼ねる。此れらによる効能。甚だ深し。濟度は別に掲げるなり。是れを以て。此の靈神は三部を以て本體と為す。殊に以て微妙なれ

ば。ここにおいて知るべし。當社太神は三部和合を以て。其の正意となすなり。草木國土を以て依報。正報と為す。並びに法身如来。色心不二。常寂光土の身土一躰を表示し給ふなり。即ち真言。天台。即身成佛の義。草木成佛の理。此處において。此の靈地證知すべき事なり。

古老口傳に云く。天神における末席にいたる靈神まで。葦原中津國を草創し給ひ。當山に天降りまして。初めて男女。陰陽を儲け給ふなり。その後には於いて。世間草木を造り。國を神國と號し。神名を大神となす。時に伊弉諾。伊弉册の二神は改めて嫡子に譲り。檜原宮に於いて住み給ふなり。其の嫡子は當所大宮三所の内。第一神なり。今伊勢太神宮と申す。即ちこの太神御事なり。

一・當社神宮寺大御輪寺の事

此の寺は。人皇第十一代垂仁天皇御宇治世九十九年の時建立草創の梵闍なり。時に武一原大納言と云ふ人有り。一人娘の許に當社明神夜々秘かに尋ね行く。彼女に懸想し。終に一人の男子を生む。娘の兩親は娘の此の振る舞いを怪しく想い問ひつめたるも。娘

には覺えがこれなく。疑ひを晴らす為に。極く細い糸を用意し。忍び來たりし彼の人の装束の裾に。密かに縫い付け給ひ。一夜明けてより。其の糸を辿り行くと。真直に三所の内なる大宮の社壇に入り給ふ。此の時始めて神明で有る事を知り奉る。即ち大蛇の御形にて。皇子の背を舐め給ふと。其の舐め給ふ所に金色の銘が顯れ給ふなりと。其の言云うに。正一位大明神勲一等大物主命等と有り。

今當社一の鳥居額文是れなり。彼の大納言の住まいし處に伽藍を造り給ふ。即ち大御輪寺が是れなりと有り。

一・大御輪寺影觀音の事

古記に云く。彼の大納言の孫皇子誕生後。七ケ日を経て母の儀早世す。皇子成長の後。悲母を戀い慕う心甚だしく。寺内の石の上にて身を震わせ悲泣愁傷のさま深し。此処に彼の母を戀い慕ふ孝情に感じたる怪しの人現れ、悲母の形を造り給ふて皇子に與え給ふなり。皇子大いに喜び。今までの愁嘆の様子。忽ちに止み給ふ。其の後皇子常に父君の大神宮に參詣す。其の形貌は白の打出笠を被り。白羽矢を持ち。夏毛の膝（ムカバキ）

をはき。白葦毛の馬に乗り。此のようにして幾年か打ち過ぎて。御年十有餘の時。大御輪寺の一室に永く參籠し給えりて。再び出で給ふ事なし。此れ則ち日本國における生身の入定の始めなり。彼の御影の事其の形相。實に知る人無し。其の後。聖德太子當寺に參詣し。御戸を開き御影を拜見し奉れば。則ち十一面觀世音菩薩の形像なり。其れ以後人皆な十一面觀音と知り奉るなり。垂仁天皇より。聖德太子の御出世まで實に六百一年なりと傳ふ。

一・當所靈神日吉山王と同體の事

記に云く。昔傳教大師大唐より帰朝し。天台宗守護神と為す。吉野勝手子守に參詣し。勸請奉るの處。彼の諸神等の辭（コトバ）に云く。我等慈氏の教法を守るなり。故に叶うべからず。此れより北方高大神なり。彼に參詣し祈るべしと。大師彼の託宣に依り。當神參詣し祈り申すべき時。大明神大黒天神の形を現す。手に杉枝を持ち大師に告げ。大師と共に趣を致すなりと。當社大明神。傳教大師の勸請に依り。大黒天神の形を現じ給ふ。故に社頭の綾杉の木は御天神なり。彼の三輪大明神の眷屬や。本躰や。兩様共不

審なり。但し事意を案ずるに。眷属としるべきかな。爾る故に當山大明神は。三身即一の大日如來なり。三室山を方便として住み給ふなれば。濁世の衆生を利益せんと。然れば。即ち是れ大黒天神なり。是れを以て綾杉を大黒天神と申すなり。大明神の御名を咒し奉るなり。示現したまうにより眷属と言ふべからず。大明神と言ふべからず。即ち。是れ大黒天神なり。梵語に摩訶伽羅と云ふなり。唐においては大黒と云ふ。理趣釋に云く。摩訶伽羅は大將の義なり。將に三世無障礙の義と謂ふなり。大毘盧遮那法身無所不變の義なりと云ふ。當社御託宣に我の躰は法界に偏ず。何れの偏ずる所。何れの草木。我の躰に非ず。我の栖に非ず等とあり。理趣釋文と。天然符合す。最も渴仰し奉るべき者なり。問ひて云く。當社大明神は。大黒天神と申す事道理諸方において相應す。尤も信受すべし。但し天照太神百王鎮護靈神なり。當社大明神は。又天照太神に當たるなり。若し然れば大黒天神は國王と為せば。依る所なきや。答えて云く。大黒天神は諸王敬事靈神なり。是れを以て天竺震日の國王宮室。皆な悉く崇重供養し給ふ。仁王經中斑足王。千王を殺すて彼の頭を取り、塚において祭る。摩訶伽羅天然。後に王位に昇らんと欲す。即ち是れ其の証拠なり。之に加へて大黒天神誓願中に云く。我れを恭敬し。我に供養せし者には。國王愛敬を蒙り。眉目萬邦に施すと云ふ。天照太神百王鎮護の誓いには。正

文保二年十一月4日夜 夢想を感ずるに依り。同じ十二月二日三輪靈神に參詣。

三日より。四ケ日の間參籠。仍て彼の神宮寺大御輪寺の縁起を尋ね求める。並びに彼の神宮寺口傳古記等、肝要の事 共に之を抄し畢。

京師白毫寺に於いて 元成尊師より 講傳を受く。

昭和四一年九月十二日

護法行者 公壽

伊勢古神道の流れを汲むものには、此の託宣形式による傳授が多いのであります。この三輪大明神縁起も、奥書に託宣形式が示されています。原文は難解で、かつ意味不明

の箇所多く、師の講傳だけではなお文意に達し難く、七日間の元成尊師、法螺貝山人の交霊傳授により、加筆したものであります。

西大寺菩薩流神道にしても、大御輪流神道にしても、その傳授においては筆記よりも口傳の方が多くありますが、雲傳流神道は天如師が纏めしものを筆記し、必要部分を口傳にて傳授してあります。和田大圓尊師と、金田元成尊師は、主に謄写版によるものを前日までに手渡し講傳された後に、傳授會で印信を授けられています。何分とも多くの秘傳あり、元成尊師も全部が全部、傳授はされていません。参考までにのべますと。

世に伝う兩部神道三大秘記「寶山秘記、朝熊山秘記、大神秘記」は、何れも兩部神道の初期の秘傳書とされていますが、中でも此の『葛城寶山記』は役行者の仮託によるものとされてはいます。しかし、その内容は出雲神事秘事に基づいており、葛城王朝縁のものでなければ書けないものであります。から、当然難解であり、意味不鮮明のため今日まで埃を被ったままであります。かつて伊勢渡會家に於ては、度會行忠の『古老故實傳』を座右の神書と扱われていますが、その中において最極秘傳の五書の一つに数え上げられている程、貴重な秘傳書でありますから、此れを拝読すれば、役行者は俗に云う修験者ではなく、正統中臣神道繼承者である事が明らかとなります。通称『葛城寶

山記』、『金剛寶山記』、『神祇寶山記』と呼ばれていますが、柱源神法では『大和葛城寶山記』であります。葛城神道では『兩部神道葛城寶山記』であり、これに基づいて神祇講式が作成されたのであります。

(以下、別記)